

〔論 説〕

ワーズワス作「イチイの木」に関する一考察*

山 田 崇 人

はじめに

ワーズワス (William Wordsworth) の詩“Yew-Trees”は、湖水地方に実際に存在するイチイの木を歌ったもので、最初に書かれたのはワーズワスの創作の絶頂期とも言える 1804 年だとされているが、出版されたのはずっと後の 1815 年で、それは最初の原稿とはかなり異なるものとなっていた。幸い最初の形を示す原稿と、かなり改定された原稿が残っていて、それらにはさらに加えられた修正が記録されているので、どのように最終形になったのかを窺い知ることができる⁽¹⁾。ワーズワスのことをおそらくは最もよく理解し、彼の評価を決定づけたと言えるコウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge) は、1817 年出版の『文学的自叙伝 (*Biographia Literaria*)』のなかで、ワーズワスの最も優れた特徴としてシェイクスピア、ミルトンに匹敵する想像力の持ち主と称え、それを表す例として最初に挙げているのがこの詩である⁽²⁾。またワーズワス自身もこの詩を気に入っていて、ヘンリー・クラブ・ロビンソン (Henry Crab Robinson) に勧めているが、ロビンソンのこの詩に対する反応は、「いい詩ではあるが、どこが優れているのかというと自分にはよくわからない」というものであったことはよく知られている⁽³⁾。

ケリー (Teresa M. Kelley) の言葉を借りるなら、それを反映するかのよう、この詩はコウルリッジが取り上げて以降はあまり言及されることはなかった⁽⁴⁾。あるいはリファテル (Michael Riffaterre) が言うよう

に、それなりの賞賛は受けるものの、ちょっと言及される以上のことはなく、本格的に論じられるのは1960年のBrooksとWarrenの *Understanding Poetry* を待たなければならなかった⁽⁵⁾。そしてようやく1970年代になってから、取り上げられることが増えてきている。2015年の *The Oxford Handbook of William Wordsworth* では、序にあたる章で“Daffodils”と“Yew-Trees”の二つが同列に取り上げられ詳しく論じられている。“Daffodils”といえばワーズワスの詩の中で最も人口に膾炙したものと言え、イギリスの国営テレビ放送のBBCが、英国民に最も愛されている詩は何かを調べるために人気投票を行い、上位100位の詩を掲載した詩集 *The Nation's Favourite Poems* において、第5位に入った作品である。もちろんワーズワスの詩の中では最上位である。しかし *The Oxford Handbook* によれば、“Daffodils”は発表された当初はむしろ批判されることが多く、コウルリッジさえ欠点を指摘した。一方“Yew-Trees”のほうはすでに述べたように、高く評価する人がいたにもかかわらず、なかなか広く知られるには至らなかった。といっても、それを不思議だとまで言うつもりはない。ワーズワスの最高傑作と言え、例えば“Lines composed a few miles above Tintern Abbey”, “Resolution and Independence”あるいは“Ode: Intimations of Immortality”のような、ワーズワスが彼自身の声で語った詩としてコウルリッジが非常に高く評価し、テーマにおいても自然と人間の関わりについて深い考察を行っている作品がすぐに思い浮かぶが、これらはそれぞれ150行から200行ほどの長さの重厚な作品である。それらに比べると“Yew-Trees”は33行の比較的短い詩であり、それほど深い内容は期待できない一方、表現の複雑さのため“Daffodils”のように親しみやすいとは言えない。ではコウルリッジやワーズワス自身の高い評価はどこにあったのだろうか。それを探してみたい。

1. Yew-Trees

There is a Yew-tree, pride of Lorton Vale,
Which to this day stands single, in the midst
Of its own darkness, as it stood of yore:
Not loth to furnish weapons for the bands
Of Umfraville or Percy ere they marched
To Scotland's heaths; or those that crossed the sea

And drew their sounding bows at Azincour,
 Perhaps at earlier Crecy, or Poitiers.
 Of vast circumference and gloom profound
 This solitary Tree! a living thing 10
 Produced too slowly ever to decay;
 Of form and aspect too magnificent
 To be destroyed. But worthier still of note
 Are those fraternal Four of Borrowdale,
 Joined in one solemn and capacious grove; 15
 Huge trunks! and each particular trunk a growth
 Of intertwined fibres serpentine
 Up-coiling, and inveterately convolved;
 Nor uninformed with Phantasy, and looks
 That threaten the profane; a pillared shade, 20
 Upon whose grassless floor of red-brown hue,
 By sheddings from the pining umbrage tinged
 Perennially—beneath whose sable roof
 Of boughs, as if for festal purpose decked
 With unrejoicing berries—ghostly Shapes 25
 May meet at noontide; Fear and trembling Hope,
 Silence and Foresight; Death the Skeleton
 And Time the Shadow;—there to celebrate,
 As in a natural temple scattered o'er
 With altars undisturbed of mossy stone, 30
 United worship; or in mute repose
 To lie, and listen to the mountain flood
 Murmuring from Glaramara's inmost caves.⁽⁶⁾

1本のイチイの木がある、ロートンの谷の誇り、
 今日までただ1本で立っている、自らの暗闇の
 真っ只中に、はるか昔にも立っていたように、
 アンフラヴィルやパーシーの軍隊が
 スコットランドの荒野へと進軍していく前に

ワーズワズ作「イチイの木」に関する一考察

彼らに武器を提供することを厭わずに、あるいは海を渡って
アジャンクールで、もしかしたらもっと前のクレシーやポワティエで
鳴り響く弓を引いた人々にも厭わずに。
広大な領域に広がる深い暗がりを持った
この孤独な木よ！生きているものであり
極めてゆっくり生成されるため永遠に朽ちることはなく
あまりにも壮大な姿形をしているため
破壊されることもない。しかしさらに注目すべきは
ポロウデイルのあの4兄弟
集まって、一つの巖かで奥深い森を作っている、
巨大な幹だ！そしてそれぞれの幹は、よりあわされた
蛇のような繊維がトグロを巻き上げながら、
執拗にねじりあわされて、成長したもの
そしてまた幻想がないわけでもなく、冒瀆する者を
恐れさせる容貌もなくはなく、一柱で支えられた暗がり、
しおれた木の葉が毎年散って降り積り
赤茶色になった、草の生えていない
床の上で—祝祭のためであるかのように、
喜ばないベリーで飾られている枝が成す
薄暗い屋根の下では—幽霊の姿をしたものが
昼間に集まっているかもしれない、「恐怖」と、慄く「希望」
「沈黙」と「予見」、骸骨姿の「死」と
影の姿の「時間」—その場所で
苔むした石の乱されていない祭壇が
あちこちに置かれた自然の寺院の中のように
共同の礼拝を行うために、あるいは黙って横たわって休み
グララマラの最奥の洞窟からサラサラと流れ出す
山水（やまみず）の音を聞くために

まず「今日までただ一本で立っている」というところが非常に印象的である。Lortonのイチイは長い年月を経て、人間世界にも関わってきた。しかしそれも昔のこととなり、かつて関わった人々が消え去った後も孤独に立っている。従って自分の世界を作り、その暗がりの中に一人存在する

ようになってしまった。

それに対し、Borrowdaleの方は、4本の兄弟で、孤独ではない。4本で natural temple を形成する。そこでは毎年降り注ぐ葉っぱによって、地面が赤く色づいているわけで、「毎年 (perennially)」という言葉で年月が強調されている。しかしこちらは人ではなく、supernatural なものと呼び寄せている。人と関わっても、イチイの木に比べれば短命な人間はすぐにいなくなってしまう。結局は一人になってしまうので、人ではないものを住まわせて、孤独にならないようにしている。というわけで、Borrowdaleのイチイのほうが、より注目に値するものだ、ということ述べているだけの単純な内容の詩であるように思われる。

しかし Ghostly shapes とはいったい何であろうか、そしてそれはみんなで一緒になって礼拝 (united worship) を行うというのだが、worship の対象は何であるのだろうかということが人々を悩ませてきた。一つの答えとしては、これはヴェルギリウスの『アエネイス』第6巻の、地獄への入り口にある楡の木の周りにいる擬人化された存在に似ているので、それを意識したものだろうというものである⁽⁷⁾。しかしその類似性を認めても、ワーズワスがそれまで避けてきた18世紀的アレゴリーをなぜ突然取り入れたのかについては疑問が残り、またこの詩に現れた Fear, Hope, Silence, Foresight, Death, Time が何を意味するのかはよくわからないままである。Brooks と Warren は、これらは時間と、人間の死すべき運命 (mortality) について深く考えることから生まれるものと解釈している。すなわち Time the Shadow と Death the Skeleton は人に Fear と trembling Hope を抱かせ、Foresight を要求し、silent contemplation を行わせるものと考えている⁽⁸⁾。かなり説得力はあるが、それで完全に納得かという、まだ何かもやもやしたものが残る。それがワーズワスの詩の魅力だと言ってもいいのかも知れないが。

2. “Yew-Trees” はこれまでどのような扱いを受けてきたか

19世紀においては、この詩は湖水地方案内、あるいは湖水地方の風景とワーズワスの詩を結びつけた本でよく取り上げられている。そしてその中では、ワーズワスが描いたイチイの木が現在どうなったかということが紹介されている。J. C. Shairp は *Studies in Poetry and Philosophy* においてワーズワスの詩の特徴を述べ、その例として“Yew-Trees”の後半を引用

している。さらにイチイの木がワーズワスにとって重要なものであったことを示すエピソードとして、ワーズワスが8本のイチイの木を移植したことを紹介している⁽⁹⁾。

William Knight は *Through the Wordsworth Country* において、ワーズワスの詩を全文引用した後、Borrowdale の木の1本が1883年の嵐で倒れたことを紹介している。またLortonのイチイについても現在の状況を示すとともに、この木がもっと昔からよく知られた木だったことを紹介している⁽¹⁰⁾。

またH. D. Rawnsley は *Literary Associations of the English Lakes* において、ワーズワスの詩の後半部を引用し、1888年の嵐でBorrowdaleのイチイが破壊されたことを紹介している。さらにLortonのイチイの木も紹介し、ワーズワスの詩の最初の部分を引用している。そしてこの木が1653年にはGeorge Foxの話聞こうとする人々ですずなりになっていたことも紹介している⁽¹¹⁾。

このように、以前はこの詩は、詩自体の解釈を語るよりは、詩が描いた対象物を紹介しながら言及されることが多かった。その理由としては、この詩で称えられているのは特定のイチイの木であり、それらはなかなか簡単には見に行けない場所にあること、イチイの木の多くは墓地に植えられていて、普段あまり意識して見ることがないものであること、聞き慣れない人名や地名がいくつも出てきてあまり身近な内容には思えないこと、全体は3つの入り組んだ文からなり、難しい言葉や表現が多くて馴染みにくいことなどが挙げられるかもしれない。ワーズワスの詩の中で最もよく人々に知られた“Daffodils”が、毎年春になれば身近に目にすることになるラッパズイセンを歌ったもので、スイセンの大群を天の川の星に例えるなど分かりやすい比喩を使っているのとは対照的である。

3. “Yew-Trees” の知名度

この詩がどれくらい一般に認知されているかの一つの指標として、ワーズワスの詩の選集や、他の詩人の作品も一緒に集めたいわゆるアンソロジーで、この詩がどれくらい取り上げられているかを調べてみた。内訳はアンソロジーが5冊、ワーズワス選集が11冊の合計16冊で、収録されている詩の数はアンソロジーでは20遍から40遍程度、選集では30遍程度のものから170遍あまりのものまでである⁽¹²⁾。出版年は、1861年の

Golden Treasury を除くと 1950 年から 2016 年までである。結果は、“Yew-Trees”は 16 冊中 7 冊に収録されていた。その内訳は次のようになる。まずアンソロジーにはどれにも収録されていなかった。そして詩の数が 50 遍に満たないものには、最新の 2016 年出版の 1 冊を除いて、収録されていなかった。また出版年が 1995 年以前のものでは、収録詩の数が 150 遍以上という突出して厚い 2 冊を除いては収録されていなかった。まとめると、1995 年まではハンディーな詩集でお目にかかることはなかったが、1996 年以降はワーズワスの *selected poems* には必ず収録されているということになる。このことから、この詩は最近になって評価が上がってきたということが言えそうである。

一方この詩はイチイの木自体に興味を持っている人々の間ではよく知られているようである。1897 年に John Lowe によるイチイの木の研究書である *The Yew-Trees of Great Britain and Ireland* が出たが、これには“Yew-Trees”が全文掲載されている。

そして 100 年ほどが過ぎた 1990 年ごろから、イチイの木の研究書が数冊出版され、またイチイに限らずイギリスの名木を紹介する本も数冊出された。その全てが Borrowdale のイチイの木を紹介し、ワーズワスの詩を引用している。そしてほとんどが写真も掲載している。興味深いのは、その引用のしかたと写真である。ワーズワスの詩は、まず Lorton のイチイの木を紹介した後、「しかしそれよりも注目すべきはボロウデイルの 4 兄弟 (“But worthier still of note/Are those fraternal four of borrowdale”)」と語り、「巨大な幹だ! (“Huge trunks!”)」と続くが、まるでそれを反映するかのよう、Borrowdale のイチイに関する部分のみを引用した上で、その幹をアップでとらえた写真を掲載しているのである。例えばエリザベス女王の在位 50 年を記念して、イギリス全土から選ばれた著名な木 50 本を紹介した、2002 年出版の *Great British Trees* にも Borrowdale のイチイの木は含められ、その巨大な幹の写真が掲載されている。一方 Lorton のイチイについて書かれているものは少なく、1998 年出版の Thomas Pakenham による *Meetings with Remarkable Trees* が写真とともに紹介しているのが目立つ程度である。コウルリッジがこの詩を引用したときに、Borrowdale のイチイについて書かれた部分のみを取り上げ、前半の Lorton のイチイの部分は載せなかったのだが、もしそのことが影響しているのだとしたら興味深いことである。

4. “Yew-Trees” はワーズワス的な詩と言えるか

一般的に言って、他の詩人の作品も一緒に入っているアンソロジーに取り入れられているものは、ワーズワスならではの詩であろうから、ワーズワス的であろう。ワーズワスだけの詩を選んだ Selected Poems では、さらに、こんな詩も書いているのかというような、少々驚きを与えるものも入ってくる。“Yew-Trees”は最近になってようやく選集に入るようになったので、ワーズワスならではの詩とはあまり思われていなかったのかもしれない。

ではワーズワス的な詩とは何か。彼が自分の言葉で語った詩で、人間と自然との関わりについて述べたものが第一にくる。“Ode: Intimations of Immortality”は全ての詩集に収録されており、“Tintern Abbey”と“Resolution and Independence”は、1冊を除いて全ての詩集に入っている。これらに次いで多くの詩集に入っているものに、“Daffodils”と Lucy Poems がある。“Daffodils”は、イメージの分かりやすさ、親しみやすさで、最もよく知られた詩になっているのであろう。テーマはそれほど深くはないように思われるが、それでもワーズワスの詩論を展開しているとも言えるので重要な作品である。一方 Lucy Poems は、非常にユニークな、ワーズワスならではの詩であるので、代表作と言える。

では“Yew-Trees”はどうか。この詩は語り手が誰なのかよくわからないということが指摘されている⁽¹³⁾。イチイの木自身が語っているのか、それともその土地の守り神のようなものか、ということで、この詩を“most ghostly poetry ever written”と Hartman は呼んだ⁽¹⁴⁾。そして後半にはワーズワスらしからぬ擬人法まで出てくる。というわけで一体何を述べているのかよくわからないところがあり、これまでは敬遠されてきた。しかしその謎めいたところがワーズワス的とも言え、近年人気が出てきたようである。

ところでワーズワスにとって木は重要なものだった。*The Oxford Handbook*によれば、daffodil はワーズワスの詩全体で二度しか出てこないが、イチイの木は至る所に出現するということである⁽¹⁵⁾。

“A slumber did my spirit seal”の最後の2行は次のようになっている。

Rolled round in earth's diurnal course
With rocks and stones and trees.

ここで rocks and stones と言っているのは、“Resolution and Independence”に出てくるような、どこからここに来たのだろうと人を驚かすような巨石であろう。単にそのあたりに転がっている石や岩のことを言っているのではない。そしてそのような岩や石と同列に木を並べていることから、ワーズワスは悠久の時を、同じ場所に存在し続け、生き続けるものとして木をイメージしていると思われる。

そして“Yew-Trees”は、特定のイチイの木を歌ったものである。その結果、この詩はその描いた木、Lorton と Borrowdale のイチイの木とともに語られるようになった。これらの木が生き続ける限り、この詩も読まれ続けるであろうし、この詩が忘れられない限り、これらの木も保護されて存在し続けるだろう。シェイクスピアが、パトロンである美貌の青年貴族の美しさを、自分の詩によって永遠のものとしてみせると歌ったように。

Nor shall death brag thou wander'st in his shade,
When in eternal lines to time thou grow'st:
So long as men can breathe or eyes can see,
So long lives this, and this gives life to thee.⁽¹⁶⁾

5. イチイの木について

さてワーズワスはイチイの木のどこに引かれたのだろうか。まずイチイの木は極めて長寿だということがある。上に引用したように、“A Slumber did my spirit seal”においてワーズワスは亡くなった少女が永遠に地球の自転とともに回り続けていると語った際、「岩や石や木とともに」と述べている。木を岩や石と同列に並べているのである。そしてイチイは木の中でも特に寿命が長いことで知られている。Lorton のイチイは樹齢 1000 年と言われ、Borrowdale のイチイは 1500 年以上とされている。そしてこの詩に関してワーズワスが友人の Isabela Fenwick に語ったことによれば、Borrowdale の近くに、倒れたイチイの木の巨大な幹があるが、その大きさから考えて、キリスト教と同じくらいの年齢に違いないということであり、また道案内人のハットンは、その木はノアの洪水の前からあったに違いないと言っているというのである。通常ワーズワスは自分の詩の理解に有益なコメントをイザベラに語っているのだが、この詩に関しては、Lorton のイチイは今でもあるが、枝が切られて小さくなってしまったということを述べただけで、あとは詩とは直接関係のない話に終始している

ところが興味深い。

通常この Fenwick notes はワーズワスの詩を理解する上で非常に有力な手がかりを与えてくれるものだが、この“Yew-Trees”の詩に関しては、あまり役に立たないとも言われる⁽¹⁷⁾。しかしワーズワスがイチイの木の何に引かれていたのかについては十分に伝えてくれている。イチイの木について考えるとき、ワーズワスは永遠の時に思いを馳せていたと想像できる。この詩は、特定のイチイの木から語り始め、その長い歴史を見てきた木から、その歴史も超越した森へと移る。はるか昔の中世ロマンスを連想させるような歴史を見てきた木から、ファンタジー世界への入り口とも言えそうなイチイの森へと移り、こちらの方が注目すべきだと述べる。そこには超自然的な ghostly shapes が存在し、それが最後は彼方から流れてくる flood の音を聞いているというイメージになって終わる。意識はどんどんと遠くへ向かい、視覚を超え、遙か彼方の、それも地底から流れ出す水の音に耳を澄ます。異世界への入り口であるので、これらの ghostly shapes がヴェルギリウスの番人だという読み方もありうると思える。しかしそれが何かということにこだわることはないのかもしれない。それらが集まって worship するのは、さらにはるかなもの、全てを超越したものということになるのであろうか。

Fred Hageneder によれば、通常の樹木の生涯は、形成期、成熟期、老化期の3つに分かれる⁽¹⁸⁾。幹が太くなるのに合わせて樹冠（樹木の葉で覆われた頂上部）も大きくなっていくのが形成期であり、樹冠が最大になるとともに幹の太くなる速度が緩やかになるのが成熟期である（温帯の樹木のほとんどは、そこまで40年～100年程度である）。木の大きさが養分の吸収の限界を超えたときが老化期であり、樹冠が一部枯れて光合成を行う葉が減り、ほとんど成長しなくなったあたりで寿命を迎える。しかしイチイの場合は成長速度が極めて遅くなくても寿命を迎えることはなく、いつでも再び形成期に戻ることができる再生能力を持っているため、極めて長寿となる。Toby Hindson が2000年にイチイの木の7つの成長段階を提唱している⁽¹⁹⁾。それによると第1段階は苗木の状態でゆっくりと成長している時である。第2段階は若木の段階で、成長速度が早くなっている時である。第3段階はがっしりした木で、最大サイズに到達し、成長が安定してくる。第4段階では幹の成長がゆっくりになり、幹の中心の空洞化が始まる。そうすると空洞化が進むにつれ、樹冠を支えるために、幹の周

辺部が厚くなり始め、幹の太さが増大する。第5段階は完全に中がうつろになった木で、しかしまだ樹冠は維持され、それを支えるために幹は太くなり続けている。しかしこの段階の最終局面では、背の高い中空の幹は自分を支えきれなくなって崩れ始め、樹冠も一部失われる。第6段階は殻(shell)であり、背の低くなったうつろな幹で樹冠もほとんどない状態で、成長はほぼ止まってしまう。最終段階である第7段階は環状に並ぶ木で、うつろになった巨大な幹が崩れて、残った部分が再生し、それぞれ独立した一本の木になって環状に並んだ状態である。あるいは全て崩れてしまっても、切り株または根から芽が出て木となり、生命は継続し、その木の生涯の始まりや終わりを判断するのは不可能になり、年齢はなおさらわからなくなるということである。

この成長段階から判断すると、Lorton のイチイは樹冠が最大になった第4段階から第5段階あたり、Borrowdale のイチイは“Huge Trunks!”と幹に注目しているので第5段階ということになりそうである。

さらに Hageneder はイチイの木の外形について興味深いことを述べている。すなわちイチイの木は幹が中空になってくると、重い樹冠を支えるために幹の残った外側の部分が盛んに再生を行う。それは曲がりくねった波打つような形になることが多い。そして彼はこう語る。“The swelling of many old yew-boles into burrs, with convoluted, intensely gnarled and irregular structure ('grain') beneath, is probably the result of generations of adventitious growth, stimulated to regrow by prolonged exposure to browsing.”⁽²⁰⁾ (多くの年取ったイチイの幹が膨れ上がってこぶ状になり、樹皮の下のねじれてひどくふしくれだつて不規則になった構造(木目)はおそらくは長らく動物に食べられることによって再生が促され、何度も不規則に成長した結果であろう。) イチイの幹のねじれたような不規則な形について述べたものだが、ワーズワスによる Borrowdale のイチイの幹の描写である *inveterately convoluted* に少し通じるところがある。Hageneder は *convolve* ではなく *convolute* という語を使っているが、この二つの語は語源的に同じ言葉で、意味はほぼ同じである。従ってワーズワスがイチイの幹を描写した“each particular trunk a growth / Of intertwined fibres serpentine / Up-coiling, and inveterately convoluted;” という独特な表現は、しっかりと木を観察して出てきたものと言えるかもしれない。

6. Umfraville, Percy について

“Yew-Trees”は、ワーズワスの最もよく知られた詩といえる“Daffodils”と比べると、かなり馴染みにくい詩である。行数においては“Daffodils”の24行に対し、“Yew-Trees”は33行と9行長いだけであるが、“Daffodils”は1行が8音節から成る弱強4歩格で、韻を踏んだ6行から成るスタンザで構成されていて軽快に読めるのに対し、“Yew-Trees”は10音節の弱強5歩格の行から成る無韻詩で重々しい感じがする。また用いられている語彙に、circumference、intertwisted、inveterately など多音節語が多く、また固有名詞もたくさん出てきて、外国人にとっては特に注釈が多く必要となる詩である。

そしてコウルリッジによって後半の Borrowdale のイチイの部分だけが引用されたこともあって、Lorton のイチイを歌った前半と後半とは対照的な内容と見る見方が優勢である。そこを検証するにあたり、Lorton のイチイについての部分を少し詳しく見てみたい。

Lorton のイチイは巨大ではあるが、いにしえから今日までたった1本で立っている木である。しかし人間との関わりはそれなりにあった。Umfraville や Percy に武器を提供することを厭わなかったという。*Dictionary of National Biography (DNB)* によれば、Umfraville も Percy も Norman Conquest の時にノルマンディー公ウィリアムに従ってイギリスに渡ってきた貴族を先祖に持ち、イングランド北部に領地を与えられて、スコットランドとの国境を守った人々である。*DNB* を参考に、スコットランドへ進軍したと思われる Umfraville 家と Percy 家の人々を挙げると、次のような名前が出てくる。

Gilbert de Umfraville, seventh earl of Angus (1244?-1307) は、1296年にイングランドとスコットランドの戦いが始まった時、(イングランドとスコットランドの両方に領地を持っていたが) King Edward についた。1298年にはスコットランドとの戦いで中心的な役割を果たし、Edward の軍は Falkirk で勝利する。

Robert Umfraville eighth earl of Angus (1277-1325)

Gilbert の次男。30歳の時、父親のイングランドとスコットランドの領

地を受け継ぎ、Edward II の忠実で精力的な支持者となる。battle of Bannockburn (1314) で Edward II の側について戦う。

Gilbert Umfraville ninth earl of Angus (1309/10-1381)

Robert Umfraville の息子で父親が亡くなった時 15 歳。この時期の主要な戦いのほとんどに参加している。Dupplin (1332), Halidon Hill (1333), Nevilles Cross (1346)。スコットランドでの活動では Sir Henry Percy (d. 1352) と密接に関わっている。2 度目の結婚相手 Matilda Lucy は Cockermouth の大土地と Cumberland の領地をもたらした。

Sir Robert Umfraville (d. 1437), soldier

Sir Thomas Umfraville (d. 1387) の次男。the battle of Otterburn (1388) で Percy の側について戦う。さらに the battle of Homildon Hill (1402) にも加わった (イギリスとスコットランドの戦い)。1415 年には Henry V について、フランスでも甥とともに戦う。Henry V の命でそれまでイギリスとスコットランドの国境を守っていたので、Agincourt には間に合わなかったが、その後のフランスとの戦いで活躍する。しかし 1417 年にはイギリスに戻って再び国境を守る。

Sir Gilbert Umfraville (1390-1421)

Sir Robert Umfraville の甥 (Robert の兄 Thomas Umfraville の息子) Prince Henry が計画した 1511-12 年のフランスへの出征に参加して活躍し、Prince Henry の信頼を得る。そして Agincourt その他で活躍する。

Henry Percy, first Lord Percy (1273-1314)

Edward I のスコットランド征服において活躍。

Henry Percy, second Lord Percy (1301-1352)

first Lord Percy の息子。Edward III と息子 Black Prince がフランスで Crecy の戦い等を戦っていた時、イギリスで国境を守っていた。

Henry Percy, third Lord Percy (c. 1321-1368)

second Lord Percy の息子。父親が国を守っていたので、彼はフランス

ワーズワス作「イチイの木」に関する一考察

に渡り、Crecy の戦いに加わっている。

Henry Percy, first earl of Northumberland (1341-1408)

third Lord Percy の息子。20 代の頃からスコットランド国境の守護を任されていた。2 番目の妻は、Gilbert Umfraville の未亡人で、この結婚によって Cockermonth に領土を得ている。

Percy, Sir Henry (called Henry Hotspur) (1364-1403)

父親のスコットランドでの戦いにおいて、14 歳で初陣を果たす。そしてその進軍、攻撃の速さから、スコットランド人によって Hotspur のあだ名をつけられる。Battle of Otterburn で James Douglas と戦った。これはスコットランドの勝利となり、Percy は捕虜となったが、James Douglas は戦死した。この様子はバラッド Chevy Chase に描かれている。1402 年には Homildon Hill でスコットランド軍に対し大勝利を納めている。

アジャンクール、クレシー、ポワティエは英仏百年戦争においてイギリスがフランスに大勝利した有名な戦いで、ロングボウ（長弓）が非常に大きな役割を果たしたと言われる。一方イングランドとスコットランドの戦いでロングボウが重要な役割を果たしたのは Battle of Falkirk (1298)、Battle of Bannockburn (1314)、Battle of Dupplin Muir (1332) などである。このうち Falkirk の戦いが、ロングボウによって勝利した主要な戦いの最初のもつとされる。逆に Bannockburn の戦いは、中世においてスコットランドがイングランドに勝利した最後の戦いであり、この時はイングランドのロングボウはその威力を十分に発揮できなかったという。しかしイングランドはここから多くを学び、これ以降ロングボウを使って勝利を収め続けるのである。そしてロングボウの材料としてはイチイの木が最良だとされている⁽²¹⁾。Lorton のイチイは Cockermonth の近くに位置しているため、そこを所領にしていた Umfraville、後には Percy の軍隊が、この木からロングボウの材料を得たかもしれないという想像につながっている。

ワーズワスは特定の人、あるいは戦いを念頭に置いていたと考える人が多いが⁽²²⁾、Umfraville も Percy も、何代にもわたってスコットランドと

の国境を守り、あるいはスコットランドへ進軍した人々である。さらにクレシー、ポワティエ、アジャンクールの戦いにも参加している。従って、100年以上にもわたる長い年月の間に起こったことを、Lorton のイチイの木は、積極的に関わるわけでもなく、消極的に無関係を装うわけでもなく、自分の作り出す暗闇の広がりを中心において、ただ静かに見守ってきたということが、これらの人名によってむしろ強調される。それもあって、このイチイの木が昔と変わらず今も自らの暗闇の中心に一本で立っていることを述べた最初の3行と、この孤独な木が非常にゆっくりと成長し、あまりにも巨大であるので破壊することができないということを述べた5行によって、人間と関わった歴史の話が挟み込まれた形になっている。この、人間の世界にどのような騒乱があっても、自然の風景は変わることなく続いているというイメージを描いていて、この詩と通じるところがあると思われる俳句がある。次にそれについて述べる。

7. 芭蕉の俳句との類似点

松尾芭蕉の有名な俳句に次のものがある。

夏草や兵（つわもの）どもが夢の跡

いうまでもなくこれは、『奥の細道』の「平泉」に出てくるもので、この句を詠んだときの状況が次のように語られる。すなわち、三代続いた藤原氏の栄華も一睡の夢のようにその名残を示すものはほとんどなくなり、（藤原秀衡が源義経のために築いた城館である）高館（たかだち）に登って眺めてみると、大河の北上川が見え、衣川がこの高館のところでそれに注いでいる。そしてかつて義経が選りすぐりの忠臣と高館にこもって功名を求めたのもひと時のことで、今は一面の草むらとなっているのを見て、「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」という杜甫の詩を思い出し、しばらく涙を流した、と。

俳句のような短い詩は、それが作られた状況やその背景にあるものとともに鑑賞して初めて、それを詠んだ人の気持ちが伝わってくるものである。もちろんこの句はそれだけでも、強者をイメージさせる兵という言葉が、夢という儂いものと結びつくことで、その対比が深い感慨を生む。さらに夢は、一夜の儂いものというだけでなく、未来への希望という意味を

見ることもできる言葉で、そうすると戦士たちが抱いた想いが強く感じられてさらに感慨が深まる。そしてその痕跡が夏草に見られるというわけで、夏草はイチイの木とは違って冬になると消えてしまうものであるから、儂さにつながることもあるが、しかし毎年変わらず生えてくるものでもあるから、永遠の時も連想させると言えるし、夏にはその勢いから枯れることなど感じさせないものである。ここからは主観的な解釈となってしまうが、昔のことに思いを馳せながら眺めていれば、かつてそこで戦った兵士たちの想いが蘇り、合戦の音や鬨の声が聞こえてくるように感じられるであろう。またこの風景のなかには2本の川が流れていて、一方がもう一方に注いでいる。“Yew-Trees”のような、流れる水の水音への言及はないが、視覚イメージが永遠の時を感じさせる。それに比べれば、奥州藤原氏の3代、数十年に渡る繁栄も一睡の夢のように短いものと感じられる。またこの場所が、義経が最期を迎えたところだと知れば、兄弟の争いが与える切ない想いととも、その最期に至るまでに起こった様々な出来事、さらには保元物語、平治物語、平家物語などに語られた長い戦いの歴史なども蘇ってくる。それが儂く消えていったことを思うと、芭蕉がひとしきり涙を流した気持ちも理解できる。

8. Phantasy に関して

『奥の細道』が書かれたのは1702年なので、この俳句が言及している出来事が起こってから500年以上が過ぎていることになるが、一方“Yew-Trees”が最初に書かれたのは1804年であり、そのなかで言及されている出来事は1300年から1400年ごろにかけてのことなので、400から500年くらい前の事になる。神話や全くのおとぎ話となってしまうほど古い時代というわけではないかもしれないが、かなり誇張されて現実離れした伝説を生み出してもおかしくないくらいには古い時代と言える。『保元物語』に描かれた鎮西八郎為朝は、5人がかりで弦を張る五人張りの強弓を使いこなし、保元の乱では獅子奮迅の活躍をするが、その後、鬼ヶ島に渡って平定したり、最後は船を矢で覆して沈めてしまうなど、現実にはあり得ないような話となる。一方“Yew-Trees”が言及する出来事としてはPercyがスコットランドのDouglasと戦ったOtterburnの戦いが血湧き肉躍る物語としてバラッド“Chevy Chase”に描かれている。こういう英雄譚は中世ロマンス的な内容になって、幻想物語風の要素を持ちうるものである。そ

のことを意識しながら、“Nor uninformed with Phantasia”という表現について考えてみよう。そうすると、Borrowdale のほうだけが phantasia で Lorton は history というわけではなく、むしろ Lorton の方がいろんな物語に満ちており、phantasia でいっぱいなのだと思います。従って Borrowdale の方はそのような歴史との関わりはないが、それでも phantasia がないわけではないということ述べているのではないかと。Fear, Hope, Silence, Foresight, Death, Time はむしろ戦いが生み出すものと言え、それらが Borrowdale にもいて、水の流れる音を聞き、その中に昔の物語を聞いているのかもしれない。“Solitary Reaper”という詩のなかで、一人で麦を刈る乙女 (solitary reaper) が歌う歌が谷に満ち溢れるのをワーズワスが聞いて、その歌声の中に昔の物語 (“old, unhappy, far-off things, / And battles long ago:”) を聴いたように。そこにはワーズワスがイチイの木を思うときに考えていることがうかがえるような気がする。はるかな時に思いを馳せているのである。それが Fenwick note にも表れていると言える。

Lorton のイチイは長い歴史を感じさせる。しかし具体的な歴史というよりも、多くの出来事がひとまとめにされたものであり、Umfuraville も Percy も特定の一人に絞りきれない。そして木はそれを超えて生き続ける。ゆっくりと成長し、あまりにも巨大であるので手を付けることもできない。しかしそれを超えているのが Borrowdale のイチイである。こちらには具体的な歴史すら出てこない。それを超越した存在が住んでいるのである。そして Fenwick note では、Lorton のイチイも Borrowdale のイチイも今でも立っているが、Lorton のほうはかなり小さくなってしまったことに軽く言及した後、それとは関係のない倒れたイチイの木について述べている。その巨大さからキリスト教の歴史ほど古い、あるいは旧約聖書の時代と同じくらい昔から存在していたかもしれない木であり、しかも倒れた木の幹からまた一面に若い木がたくさん伸びてかなりの高さになっていることを語っていて、イチイの木の生命が永遠に続いていくことに想いを馳せているように思われる。もはや Lorton か Borrowdale かという話ではないのである。

9. “Yew-Trees” の revision について

この詩の最初の原稿では、Lorton と Borrowdale のイチイはもっと密接

に繋がっていたように思われる。それは次のようになっている。

—That vast eugh-tree, pride of Lorton Vale,
Which to this day stands single in the midst
Of its own darkness as it stood of yore;
Nor those fraternal four in Borrowdale,
Joined in one solemn and capacious grove; 5
Huge trunks, and each particular trunk a mass
Of intertwined fibres serpentine
Upcoiling and inveterately convolv'd,—
Nor uninform'd with phantasy, and looks
That threaten the profane, a pillar'd shade 10
On whose [] floor, beneath whose sable roof
Of boughs, as if for festal purpose, decked
With unrejoicing berries, ghostly shapes
May meet at noontide; Fear, and trembling Hope,
Silence, and Foresight, Death the skeleton 15
And Time the shadow,—there to celebrate,
As in a natural temple scattered o'er
With altars undisturb'd of mossy stone.
United worship, or in mute repose
To lie and listen to the mountain flood 20
Murmuring from Glaramara's inmost caves;—
Pass not the place unnoticed—ye will say
That Mona's druid oaks composed a fane
Less awful than this grove, as Earth so long
On its unwearied bosom has sustain'd 25
The undecaying pile, as drouth and frost,
The fires of heaven, have spared it, and the storms,
So in its hallowed uses may it stand
Forever spared by Man!—⁽²³⁾

—あの巨大なイチイの木、ロートンの谷の誇り、

今日までただ1本で立っている、自らの暗闇の
 真っ只中に、はるか昔にも立っていたように、
 そしてボロウデイルのあの4本の兄弟の木も、
 集まって、一つの蔽かで奥深い森を作っている、
 巨大な幹、そしてそれぞれの幹は、よりあわされた
 蛇のような繊維がトグロを巻き上げながら、
 執拗にねじりあわされた塊
 そしてまた幻想がないわけでもなく、冒瀆する者を
 恐れさせる容貌もなくはなく、柱で支えられた暗がり、
 その〔 〕床の上で、その枝が成す薄暗い屋根の下で、
 枝は祝祭のためであるかのように、喜ばないベリーで
 飾られているが、幽霊の姿をしたものが
 昼間に集まっているかもしれない、恐怖と、慄く希望、
 沈黙と予見、骸骨姿の死と
 影の姿の時間—その場所で
 苔むした石の乱されていない祭壇が
 あちこちに置かれた自然の寺院の中のように
 共同の礼拝を行うために、あるいは黙って横たわって休み
 グラマラの最奥の洞窟からサラサラと流れ出す
 山水の音を聞くために、—
 この場所を気付かずに通り過ぎることなかれ—汝は言うだろう
 モナ島のドルイドのオークが形成した神殿は
 この森ほど畏怖すべきものではなかったと、そして大地は
 その疲れを知らない懐にこんなにも長い間
 朽ちることのない木々を支えてきたのだから、そして早魃も霜も
 天の炎も、そして嵐も、それを容赦してきたのだから、
 その神聖な用途のために、それは永遠に
 人から容赦されてありますように—

出版された原稿との大きな違いは、Lorton のイチイに関してわずか3
 行しかないことと、Borrowdale のイチイについて、出版原稿では“*But
 worthier still of note / Are those fraternal Four of Borrowdale,*”と書かれて
 いるのが、こちらでは単に“*Nor those fraternal four in Borrowdale,*”と

なっていること、そして最後に出版原稿にはない8行があることである。

したがって、最初原稿ではLortonとBorrowdaleの優劣関係は述べられていない。もちろんLortonについてはわずか3行しか書かれず、Borrowdaleについては長々と書かれているので、優劣があるとも言えるが、Borrowdaleに関する記述はLortonにも一部当てはまると見ることもできる。具体的な描写はもちろんBorrowdaleのイチイに関するものである。しかし“Nor uninform'd with phantasy, and looks / That threaten the profane”というところは、Lortonに関してもそうであるが、Borrowdaleもやはりそうだ、という意味でNorを使っているようにも思えるのである。それはともかくとして、この詩で述べていることはまとめると次のようになりそうである。

Pass not . . . unnoticed
That vast eugh-tree, pride of Lorton Vale,
Nor those fraternal four in Borrowdale,

「あの巨大なイチイの木、ロートンの谷の誇りも、ボロウデイルの4兄弟も、気づかずに通り過ぎてはいけない」と述べているわけで、Borrowdaleに関して述べた行の先頭のNorはこのようにつながると考えると理解できる。

MonaというのはAnglesea（ウェールズの北東部にある島）の古代名で、かつてドルイドの本拠地だったため、ローマ軍の攻撃を受け、森林が破壊されてしまったという。従ってこの詩が述べていることは、LortonとBorrowdaleのイチイの木は人の手によって破壊されることなく残ってほしいという明確なメッセージということになる。しかし明確過ぎて広がりやを欠くと言え、この部分を削除したことはうなづける。

ところで、ここで“Pass not the place unnoticed”と声をかけられているyeとは誰であろうか。この詩の読者と考えてもいいようにも思えるが、Borrowdaleのイチイを見て、Mona's druid oaksよりも恐れ多いと言う存在である。Monaのドルイドが神聖視したオークの森はローマ軍によって1000年も前に破壊されてしまったのだが⁽²⁴⁾、それを見たことがある存在であり、また大地（Earth）が、朽ちることのない森をこんなにも長いこと、その懐に抱いてきたというスケールの大きな視点を持つ存在でもあ

り、そして人から容赦されてほしいと願うことから、人ではない存在の可能性が高まる。そして神聖な用途と言っているのは United warship のことであるから、それに参加している ghostly shapes の仲間と見てもよいのではないかと思われる。それではそのような ghostly shapes が worship するものは何であろうか。それは自然ではないかと思われる。このような結論に至るのは甚だアンチクライマックスではあるが、イチイの森は natural temple を形成し、Mona's druid oaks も神殿 (fane) を作り出す。temple や fane は worship を行う場所であって worship の対象ではないと言われそうだが、これらは nature の一部であり、自然は自ら worship の場を形成して worshipper を集めるのである。ワーズワス自身も“Tintern Abbey”の中で自分のことを worshipper of nature と呼んでいる。晩年にはオーソドックスなキリスト教に移行するワーズワスだが、まだこの頃は汎神論的な自然崇拜の心を失っていなかった。それをこれまでワーズワスが避けてきた擬人法を用いて表現しようとしたとすれば興味深い。

*この論文は、成蹊大学より1年間の在外研究期間を与えられたときに行った研究の一部をまとめたものである。

注

- (1) Jared Curtis ed. *Poems in Two Volumes, and Other Poems, 1800-1807* (Cornell Wordsworth), Cornell University Press, 1983, pp. 605-606
- (2) サミュエル・テイラー・コウルリッジ『文学的自叙伝』東京コウルリッジ研究会訳、2013年、pp. 442-4
- (3) Mary Moorman が *The Later Years* の中で紹介しているのを初め、Ruoff、Kelley らがこのエピソードに言及している。ロビンソンの反応は、“They are fine, but I believe I do not understand in what their excellence consists.” というものであった。Mary Moorman, *William Wordsworth: A Biography, The Later Years, 1803-50*, Oxford University Press, 1965. Teresa M. Kelley, *Wordsworth's Revisionary Aesthetics*, Cambridge University Press, 1988. Gene W. Ruoff, “Wordsworth's ‘Yew-Trees’ And Romantic Perception” *Modern Language Quarterly* (1973) 34 (2)
- (4) Kelley, p. 163
- (5) Michael Riffaterre, “Interpretation and Descriptive Poetry: A Reading of Wordsworth's ‘Yew-Trees,’” *New Literary History*, Vol. 4, No. 2, On Interpretation: II (Winter, 1973), p. 231
- (6) *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. by E. de Selincourt and Helen

ワーズワス作「イチイの木」に関する一考察

Darbishire, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1940-49), II, pp. 209-10.

- (7) Mary Moorman, *The Later Years*. さらに Steven Knapp はスペンサーヤミルトンの影響も指摘している。Steven Knapp, *Personification and the Sublime*, Harvard University Press, 1985, p. 125
- (8) Brooks and Warren, *Understanding Poetry*, Third edition, New York, 1960, p. 277
- (9) J. C. Shairp, *Studies in Poetry and Philosophy*, Edinburgh, 1868, p. 70 および p. 107
- (10) William Knight, *Through the Wordsworth Country*, London, 1891, pp.251-3, pp.255-6
- (11) H. D. Rawnsley, *Literary Associations of the English Lakes*, Glasgow Vol. 1, pp.164-5, p.233 (1906 年版)
- (12) 今回確認した詩集は以下の通りである。最後の括弧に入った数字は収録されているワーズワスの詩の数である。ただし一つの長詩から複数の抜粋が採用されているものは一つに勘定した。頭に丸印が付いているものは“Yew-Trees”を収録している詩集である。

アンソロジー

The Golden Treasury of English Verse Edited by Francis Turner Palgrave with a forward by Carol Anne Duffy, MacMillan Collectors Library, 1861 (39)

The Oxford Book of 19th-Century English Verse, chosen by John Heyward, Oxford University Press, 1964 (23)

The Penguin Book of English Romantic Verse, edited with an introduction by David Wright, Penguin Books Ltd, 1968 (21)

The Oxford Anthology of English Literature: Romantic Poetry and Prose, ed. by Harold Bloom and Lionel Trilling, Oxford University Press, 1973 (42)

The New Oxford Book of Romantic Period Verse, Edited by Jerome J. McGann, Oxford University Press, 1993 (24)

ワーズワス詩選集

○ *WILLIAM WORDSWORTH Selected Poetry*, Edited, with an Introduction by Mark Van Doren, Random House, Inc., 1950 (174)

○ *Wordsworth Selected Poems*, Edited with an Introduction and Notes by H. M. Margoliouth, Wm. Collins Sons & Co., Ltd., 1959 (155)

A Choice of Wordsworth's Verse, selected with an introduction by R. S. Thomas, Faber & Faber, 1978 (33)

William Wordsworth: an illustrated selection, edited with a critical introduction by Jonathan Wordsworth, The Wordsworth Trust, 1987 (46)

William Wordsworth Poems selected by Seamus Heaney, Faber & Faber, 1988 (45)

- William Wordsworth Selected Poems* Edited by Sandra Anstey, Oxford University Press, 1990 (45)
- *Wordsworth Poems* selected by Peter Washington, Everyman's Library Pocket Poets, Everyman's Library, 1995 (54)
 - *WILLIAM WORDSWORTH Selected Poems* (Penguin Classics) Edited and with an Introduction and Notes by Stephen Gill, Penguin Books Ltd., 2004 (77)
 - *William Wordsworth Selected Poems* With an Introduction by Peter Harness, MacMillan Collectors Library, 2004 (58)
 - *21st-Century Oxford Authors William Wordsworth*, Edited by Stephen Gill, Oxford University Press, 2010 (141)
 - *Wordsworth 'Daffodils' and Other Poems*, Selected and Introduced by Dominique Enright, Michael O'Mara Books Limited, 2002, 2016 (New Edition) (37)
 - (13) Hartman, "The Use and Abuse of Structural Analysis: Riffaterre's Interpretation of Wordsworth's 'Yew-Trees'" *New Literary History*, Vol. 7, No. 1, Critical Challenges: The Bellagio Symposium (Autumn, 1975), p. 168
 - (14) Hartman, p.186
 - (15) Richard Gravil and Daniel Robinson, *The Oxford Handbook of William Wordsworth*, Oxford University Press, 2015
 - (16) Shakespeare, Sonnet 18
 - (17) Gene W. Ruoff は、"Wordsworth's 'Yew-Trees' And Romantic Perception" p.149 note で、この詩に関する Fenwick note は、詩自体や創作時の状況については何も語っていないと述べている。
 - (18) Fred Hageneder, *Yew: A History*, Sutton Publishing, 2009, pp.74-5
 - (19) Hageneder, p.75
 - (20) Hageneder, p.73
 - (21) Robert Hardy, *Longbow: A social and military history*, Third edition, Bois d'Arc Press, 1992, p.53
 - (22) 例えば Tim Fulford は Otterburn の戦い (1388) と Homildon Hill の戦い (1402)、Brooks and Warren と Richard Gravel は Bannockburn の戦い (1314)、Gene W. Ruoff は Halidon Hill の戦い (1333) と Homildon Hill の戦い (1402) を思い浮かべている。
 - (23) *Poems in Two Volumes, and Other Poems, 1800-1807 (Cornell Wordsworth)*, p. 605
 - (24) ローマの詩人ルカサスの *The Civil War* 第3巻に、この記述があることを Richard Gravil が指摘している。Richard Gravil, *Wordsworth's Bardic Vocation, 1787-1842*, Second edition, Humanities-Ebooks, 2015, p.105